

京都大学人文科学研究所共同研究最終報告書

1. 研究課題

21世紀の人文科学

Humanities in the 21st Century: An Attempt at Understanding Our Age

2. 研究代表者氏名

岡田暁生 小関隆 佐藤淳二

Akeo OKADA, Takashi KOSEKI, Junji SATO

3. 研究期間

2018年4月-2022年3月

4. 研究目的

本研究の狙いは次の三点である： 1：私たちが今生きている、この息苦しく先が見えない世界 — それは一体なんであるのか、そしてそれはいつ始まったのかについて、それを「Humanities の危機」という相のもとに問う。それは同時に「21世紀の人文科学 Humanities の可能性」についての存在論的問いともなるはずである。 2：本研究は必然的に、同時代についての社会科学的調査とは一線を画するものとして、人文科学固有のアプローチを目指すこととなる。すなわち「この時代はいつ始まっていたのか」についての歴史的研究が中心となる。その際に1970年代が一つの焦点となるであろう。 3：本研究のもう一つの焦点は芸術である。すなわち「人文科学の危機」と「芸術の危機」を、「人間性の危機」という点で同根のものと想定し、単に1970年代以後の芸術を研究対象とするのみならず、芸術創作に携わる人々との連携を深め、そこから人文科学の可能性についての示唆を得ることを目標とする。本研究班は、歴史・思想・芸術という人文科学研究の三本柱の間の密接な連携を深めるべく、敢えて岡田暁生・小関隆・佐藤淳二という三人の班長を立てることとする。これは、一人の班長（そしてその専門分野）へと研究成果を一元的に収斂させず、ディシプリン間の真の融合を目指すという意志を示すものである。

1. What is the current world in which we have been living without clear outlook for future? When did our age commence? These are the primary questions the project would investigate. The main hypothesis the project posits is that our age has been an age of the crisis of humanities. The hypothesis implies an inquiry into the validity of humanities as a distinct academic field in the 21st century. 2. In its examination of our age the project would adopt a historical approach. It is expected that the 1970s, a likely starting point of

our age, will be a period to be most intensively examined. 3. The project would pay much attention to the field of art, for the crisis of humanities and that of art seem to be two faces of the same phenomenon. The collaboration with artists is one of the characteristic aspects of the project.

5. 研究成果の概要

本研究班の成果は、コロナ禍の到来以前のそれと以後のそれとに大別される。前者の焦点は 1970 年代にあり、少なくとも西側先進国に関する限り、世界史上で例外的といっても過言ではない 1950 年代以来の飛躍的な経済成長とそれに伴う「ゆたかな社会」の現出、個人主義の台頭、福祉国家の定着、等が、ドル・ショックとオイル・ショックによってその基盤を喪失した 1970 年代前半にこそ、現代社会に特徴的な枠組みが急速かつ不可逆的に形成されたことが確認された。後者の焦点は人文学の営みそのもの、コロナ禍が可視化した現代世界の暗部を前に、人文学がどれほどのレゾン・デートルを主張できるのかが問われたが、そこから明らかになってきたのは、人間観においても社会観においても、そして感性のありようにおいても、私たちが依拠してきた「20 世紀の人文学」が全面的にはないにせよ、かなりの程度まで失効していること、したがって、人文学研究の思考・手法に根底的な洗い直しが必要なこと、である。「21 世紀の人文学」のためのいくつかの有意な手掛かりも浮上してきた。

6. 共同研究会に関連した主な公表実績

「生きるための人文学」と題した三回シリーズの動画を制作して Youtube にアップした。後者はコロナ禍の人文学の発信の可能性を問うものとして、疫病と世界史（藤原辰史）、コロナ禍の EU（遠藤乾）、未来の音楽の可能性（三輪眞弘）を論じた。

7. 研究成果公表計画および今後の展開等

本研究班の成果は、単に個々の班員の研究を集成するのではなく、「人文学 beyond 2020」という統一テーマに関連づけられる個別研究を選択し、それらが総体としていかなる問題提起をしようとするものかを本格的な総論を付すかたちの論集のかたちをとるべきと考えている。具体的には、2022 年 1 月より出版社との相談を開始し、論集企画の精緻化に向けて鋭意検討中である。また、本研究班に関連するトピックを人文研アカデミーの企画としてとりあげることも計画されている。さらに、ウクライナ戦争やコロナ禍についてのジャーナリズムにおける班員の発信も、研究成果公表の一環といえる。